夜鶴集 八

和書門 類
三六六九四 號
二二 函
一一 架
三八 冊

内閣文庫
和書 類
三六六九四 號
三八 冊
五八 函
四 架

内閣文庫		
番號	和 36694	
冊數	38 (9)	
函號	158	1

○小早川筑前守隆景

○加藤左馬助嘉明

○藤堂和泉守高虎

○藤堂大學頭高睦

○立花道雪翁

○高橋紹雲

夜鶴集巻之八

近藤又兵衛武群輯録

小早川隆景 筑前守

○常山紀談　明の援兵大軍にて朝鮮に来り日本の軍危しと
秀吉聞て評定ありし時蒲生氏郷ハ家康卿の名代として朝鮮
を踏り返へ切従へ申して都旗を立へき也と云れしハ秀吉是よりまた
氏郷の大志何とも思慮あり又問ハれ隆景答へて隆景か議ける
ハ十万の軍にて渡海せる城を守らせ隆景先陣して明朝へ攻入
北京を攻落すへし　然ハ北京中ハ申せしにてんとハ秀吉小早川か智謀
を感せられん　下文略

○同書　安藝中納言毛利輝元ハ関ケ原の時秀家に従ふ　徳川家ニ

の家を立られしかとも関ヶ原にて自分ゟ趣ささるの旅にて安藝備後
當時本家を削られ周防長門両國を領せらる是ゟり前小早川
隆景遺訓しく輝元を諫られし中にも毛利家ハ中國部を
領し家老之職にて落ちてつかさとりかへしと是より後者も國を全る
自あるも見も腹あへきよし諫められしに輝元隆景死後を忘
果して國を削られたりさ隆景先見の明外の事も違ひ
さりけり隆景ハ武勇のうにあり次智謀世に勝れたり
父元就病中にて子等を集め兄弟和睦を示さるも
矢のくの矢を一つにして折たらむには細きりの折れて折まし
一箭つゝ分ちて折たらむにハたやすく折るとて兄弟を同して
末親しむへしと遺言せられしを隆景心に守りて始終より能く
兄弟をやめて義を守らせ兄弟和睦せしとかやられし元就
死て隆景の言に従ひへしといはれしとそ秀吉九州をうちし
平らけて筑前筑後両國を小早川に与へられしに隆景ハ
老年によりて辞し申しけれは秀吉返させ給ふきと聞りし多年に大國を与へらるゝハ
君を愛せらるゝにあり次九州をうけしん病に伏りの陰よし
思ひて秀秋に國を譲り備後の三原に引籠られし
とそ

○武隠叢話　一名古老物語　北書八
小早川隆景ハ武勇と云ひ智と云ひ言成實抜千万人に

傑出したる英雄之近代の内にハ先に猶まさりたる御方ハ無しと思ふ
成れハ秀吉公も主として遊ばされ或時伏見御城ニて秀吉公と菊亭
右府晴季公と碁を遊し給ふ　神屋宗湛も伏見ニ有之一手出来
ニて六ヶ敷碁の御座ニ秀吉公御手を業しまへとも能く手段
思召斯ニ依りて此段を宗湛へ被仰けれハ宗湛ニても謀手し相ると
御意　神屋申し此上の思召ニ指揮指南あり　下文畧

○武徳編年集成巻之四十四慶長元丙申六月小十二日前筑前牧
權中納言従三位兼行左衛門督大江朝臣隆景逝去享年六十三歳
十リ是ハ八十列ノ大守毛利大膳大夫兼陸奥守元就ノ三男ニテ
小早川氏ノ跡ヲ継テ武略雄謀ノ称アリ文畧秀吉九州ヲ征シ
筑前国ニ封ス　文畧

○翁物語　此書ノ一巻ノ六本多佐渡守正信ノ条ニ委シ　上文畧　太閤秀吉公の代に相模小田原
北条氏政氏直父子を退治として拾万余騎を引率し小田原へ
押寄られしに小田原名城として八州の人数籠りし
居城まへきと構も有り数日を送りぬ小早川隆景
ハ尾州清洲の城代に在りしを小田原へ召寄られて秀吉
公宣ハハ勝利長陣ニて諸人労まてつろしへ何か此方
の御威ニては急よ落城まてあ附城を
構へ残所城石垣山に二万余も本代として小早川も宿
是ニて太閤の御事にハ　徳川殿も杉て一ヶ月のうち三度参り

仕出しを定め抜て又天令向し物の外は知行なし奉公
なりし節ては御中を残し隆達節て申されは
此後此度の氣之丸出せは又の内隆達は一段として御勝利の根
抑し極之相向ひ御帰京至止して如し此道節ありて名を望
攻め事分く当世にても隆達を知静りて仕り仕出し
名を入まて前代引前代筆を用如し嚴麥て仕合之鍋諸人
隆達節の是非を仕ら前きて謡ともを態を云んなる眼ある
べし　扨又りて若き前より仕付小歌なんしもやら也
乱舞にても仕り故に又隆達の如しゑらを前ひて一般歌ひし
申されても秀吉公一度ならで隆達の節面披せり云の又

元禄の代にも如何なる事やし年前より隆達申されしは流行ては
元禄の代にも千紙の隆達仕り方りしを申されて秀吉公の前にて
代々の名人とし佐藏斜めより此らを隆達の節よ外て
隆達の宣止の当世にして當世如心して若き者らも小唄
をうつひ踊りをも企とし有りけれど流行りの上方ぶり
なりけれども枕しの小歌を作り裏見山の面りかしこき
岩ありて花をとうらうを神をも伝ふ様て踊りを渥して抜けて
人となり又乱舞を甚ら行きしも前もあり秀吉公今姫
山之おし隆達小付より隆達の外け紙端よ陣中の人て
目を驚かし秀吉公此如くして一度此事も前にて檜で上け

即時よ白土を以て諸の城よりも数の出張之　中文畧
然中気を屈し折節上方勢山嶺ハ相模迄も蔵の井際のうさ
を忘れいさみ立へ半年限りなし　小田原城中にて何かまして
多くの城を構へきりしたりへも皆引して小田原の城へ
出て付陣りは誠之先をもりん之次今北条にても一年も
二年も可もちへき相模計りとて城中の人々に勇気を弱らせ
半限りなし当子にハ小田原籠城して役を尽て陸奥家へ
を伝ふ申されハ早時分ハよくハ出羽の東国を知りまでもうり
色かれ候　徳川家と御内談ありて城内へ北条氏へある
色しと申秀吉公内談ありて　神原へ内通候ありれ候

神原清水北条氏直ハ御館より北条氏政より計策
何ぞての北条氏も縁者にてよりかり計策あつて申入し
北条にて御人々ありかき上方勢の内より北条氏ハ色かる庄
有りまして秀吉公深田秀家に仰有て秀家用いて深
を召して秀家の役足を堅めたる岩付千郎と以ての
あり深田家より城中へ申度子細なり皆く兵を出め
多へしとじて世の也はは城中兵を出る様して秀家の陣へ
士大将きる人加へてじて世をハ北条持口の大将ハ岩付
十郎度して取りなすも中にも諸将と云へて内通口の堅めの
雑兵の相子自を騒るう取中之岩付度内ハ上方よ

於ても隠れなし此時紀州へ来りしは浅田秀家の家中の
者なり此日にも塙団右衛門を討取りて浪人一鐵で仕官望みなく
上田宗箇之丞とて御書院の武門の廊志
不知なり長の紀州浅野家に仕へたり其上は上方
より召されしものにて南紀藩公の大将士綱十合を以上にて上方
の酒は紀州城内にて浮べなし一口飲みては気色を延ばし御座へは
大将も知行書を付けもて来られても以て多くやりければ其時の事
浅田を許して武功もなく去る程も浪人して其次第
又生禅にて多くの者のむかる岩井十郎より尤寄進之
上方人は流石なりし塵塚して岩淵浪士也内々

此方よりも浅田秀家は何付ても大将の下知を待つ
此城を責らるへし浪人岩井十郎も持口を堅め下知を待つ
扨又ては士の役めならしかしまだ岩井も二度迄の下知
志願なりしが是又浪人一手先にて塙団より仕置あり
皆一同にて岩井十郎持口より出て士是人数を出し先
此度は岩井合戦是又平士御のるの如く是をもて
是を又是は先手の大将達の二手勢と浅野長政の
若き衆も志れ候へと云送る浅田秀家様の厚情浪人中へ
此の酒を分けて長臣のこう是非中へしとも五百
塙色をなして是を頂く吉信にて召も多く

花房功者にて有ければ度々使者あれとも故なくして思ひ止まる
主として純半兵衛の為に向ひ定めして年の頃十六七計なる
小姓を撰みて使としたる時もありて近年戸川肥後守より
其の者ハ十七八にて能生れ付なる候て城際までの使を
度々勤しと宇喜多岩村十郎方より中越けれハ御の為にハ
大将の下知待つかたへ遣すへきと申して其時ハ斗り引続
時ハ出立て一目見んと御して討死せしと其身を隠し立退
城越えて出向てから申しと斯ハ如何なし中越にてと
云れしと申ても本意なき事と其ひ出向にも無し
目を定め城の内実を上より出向ひ浮田秀家ハ敵城の

城の者ども前には敵にて両陣にも秀家中ハちかハ内にて取り
たりよりも器量骨柄すぐれ若く見え候より家来
其ひ又命を全うして数ヶ度の合戦有之とて門退
其後浮田十郎方へ対陣より中さへ子細なくして中ハさ
御城中も昨日敵方も上方より遣さへ出候ハいかまて
かくてあるべきも志てよき退居けれハ小早川隆景の
陸門殿へ秀吉より御和平有て御事なき御事へ
中には如何よ進へとも北条殿も御務の由承遣なき由承候
多くて御和平なる哉も御籠城も三宅も帰陣御座候
上方へ参るも御上洛あり故に参陣中取なる事有之

幸田家の　徳川殿も此城の事　聞給て和談合あるへしと
申きこされは岩付十郎依の色を見く城中のものも先と渡候
合とて城中の人々　其後　持の者和を遂かへくは和睦を
一紙と北条殿へ家老衆頼りて申上て岩付十郎方より
深沢へ談合て申来りとて和平の思召を申越されて深沢
申けるは関白秀吉公への儀は郡内深沢にて申此城中よりは
徳川殿へ三河御通路へとも申ける處城中より　神君へ人質を
出し揃とある　神君御覧ありて秀吉公の御陣を城中へ
北条氏直小田原北条殿申越し和睦して和平を遂かくして北条殿
秀吉公へ御礼の消息として其後神君を頼られし和平之

和談調て和平を遂へきとせ　徳川殿御同意被思召けるとも
城中の人々　其ゆへは難なくも長親城を退身いたし
つの足を待らすして岩付十郎の居を破り深き大水の
如くなりけるに至て事に臨みて城中のものこそ生て
取られし門退て本城の祝をも秀吉公より北条殿
使をもつて時宜の儀を城を渡りける事の由を申されは
和平の験なし　しかるにけるは北条殿と申は後にも可然
右和平の時北条殿へ御使として和睦を遂まいらせ候の段
相かはらす今に約束を致し　城を渡り出されての事　猶和も成と
仰られけれは其時秀吉公も喜ひて使を以て申されし和睦也

残り可申毛利家へ降参し御手にても攻可申の儀ある
ちうにも城に籠りたる者とも和談調ひなされて一日二日
の内に去て新しく門退けられて又籠城の事なきように
神君の御異見にて北条殿下城なされ上方勢城中へ移り
籠て城をうけとりて又秀吉公より北条殿法師なされしと
後に北条も下城なさるる上は不叶して法師あり
神君へ御頼みなされて中共自身まかりて北条殿切腹之
翌年の御籌事　神君秀吉公へ御指図叶ひ候にて
是又は小早川隆景殊の外申出しを儀の一座にて物語なされ
候にもあるよし　下文畧

○同書　小早川隆景は名誉の者に世に申されしは家臣に
会してするは皆身の為にて思ひ称するに六ヶ敷事は皆業を思
慮されしの為一入て密事へされはりかれは年若きには
未だ心慮かりかたく申しても隠してもなるものあらへし　老功の人
相談して密を来させられたる時に密事をもつれは密して
よりかれ一生に慮されし身なれは人もよくいたされ事
には不慮にも思ひかけされは人にあつ慮し度つるに
一門の者にも申されしとなん　下文畧

○同書　毛利家の良臣椋梨と云　老人へ語て曰太閤秀吉公
御代九州中国の侍共罷出る節廉へ渡る事を廉も渡り候より

切取ニ罷越朝鮮の都へ打入候ニ付小西摂津守大谷刑部
少輔石田治部少輔ニ奉行被仰付日本勢手組を
定められ候て小早川左衛門督隆景日本勢にて切者の中にて
秀吉公御意被成候ハ兵庫抜合候へ者右渡さる治部少輔
諸侯の定め組へ自陣の外も参るましく候へて左衛門督殿よ
向て申けるハ御先見之趣へ押入備定之仕之候而も切先荒
ハ難其御討被成御入合申し申けれ共左衛門督にて荒立
代の御先手を承り武功難其手申事の外き御上意の上
を以て御先手御備定之候へハ其上ハ立申事何分御免
と致申けれ共治部少輔又申けるハ太閤の御意候由にて
兵庫抜合の功者にて御渡海の此度の兄弟もまかり
あるへきやう兄弟の不作法へにて先手の外ハ取手組兄弟の外
前の事に候や取も如何の兄弟へてかくし変候申か何かく
申候ハ左衛門督申候ハ御備定之んを存候而又候て其仕て候て
仕之事にて御抜合申て又相談申も左衛門督隆景
よく何事にも乙の事にハ九月日東八郎し申けれ共治部少輔
抜合申か何ぞあまり渡兄弟の変化也方へしと申けれ共
左衛門督四遠慮仕も却て太閤様に對し無礼
し日本の御為に御気何もの不足之事ハ無之左様御座候へ先ハ
申てかんと申して申けれハ都へ御働入の御備ニ能知

心定而利運にて下知に背たる事と申故ハ又跡より来よ
よりて思定てける事の外よかりける事もあるものにてハ是ハ
皆諸軍の評定中にてハ自然又負る事もあるものにて
其時の御思案にハ加勢申しと申けれハ
治部少輔目を塞き程よりかゝり誓約して目を明て曰
小早川殿御免候へ先毛利よりも寄合加勢中に打たちさらハ
負ける時の思案にて仕して紙を一枚ちきりて右筆
来れと呼て国の在處へかのちきりて其の備の城
取の絵図をして城をも書付て来りて誰ハ中に置と
此中にかく書もして了解小早川殿御請候へ負ける時の

思案の次第仕りて申けれハ左右なく聞召届候の御筆にて
記申して席を立ける後追付而て評城を書謂して
城迄を道請て於へ押入られ後日本勢返入して敗軍
の時備の城まてと引退て退けり時しもに引きて後に利を
取る時付より一入左右なく聞召て治部少輔作の如く御
家来方の者の備の寄と以て似たる物語御筆にて
秀吉公功者と思食て左之通の事共あり候
毛利家の者のハ加様の次第にてよかりけれと
記申しも部門より書留て今に在りと

○

同書又右の老人語て曰日本勢朝鮮の都を押入故も

寄合て両総の間を隔せ和睦をも大明国より種々様を
所て押寄の時のことく三奉行又諸大将集て相談の
詮議あり一度都を出て又其を入て又まとも手ニ入へからすとて
都を持固んと議定ありて持つめんとされとも都の広し
日本勢ハ少し詮議過て籠城も難儀し諸大将
籠城ハ不叶とて面々申して一つとして定りたる議なし
奉行諸大将京城より使を立て左馬督へ繋へ之を申遣
各相談て有りしの事共左馬督聞召所存気ニかなはて
両方合戦大明人防押寄して日本勢も騒とさらに
驚き申聊之度々に左馬督使を以て知らせ給ひへとも以ての外

敗北せしとて両大将ニ付三奉行の間へ人左馬督陣へ
来りて諸談合のまてから兎角各談又は諸大将衆の
体ならハよかるへし唯我ハ城所守るよりて異論と云て是非の事
なきなり左馬督申されけるハ諸大将何れも思ひかねつよき
事也人毎に云て是実なるかなれハ籠くして何にけ都を
捨んや兵粮なくハ夜も昼ても都を持つめらしてハ
口借りるへしかとりへし左様によりて都を持ていひつり
しかも事振りなきて異説ニ及へし諸談合の席へ
出度事なまてから事振なきてハ両方ニ事振なきと思ふ
所ハ諸軍の兵粮積りもしてみれハ今十日の間なら

てならるまし　島根の方ゟハ陣ニ於ても如何ニ候　島根
とかく只今ハ屋を合して居るまいなりのこ上方表へ
上意の由申せいかりのかハ出合候はんせて世の中を推る
の付道理をも存知のをも知らすして旗本衆をも出へき知り
とて存分知しゆ可申ことも思ひ可有と大坂の城
ニ而籠城して旗の遠もかりく候もよりけるニ付大坂の城
此日家康も出陣の由承り候へとも不及是非して
ニ而候へ二条ニ而軍の始め旗本衆籠城ニ付大坂の御所
中よりも旗本衆持参しても日本中の勢可有之しく候間
出陣して宮をも攻へきやうにかくしけれとも何事も旗本ニ付て

此中旗本衆申せしは大坂の城ハ天下の城ニ候へハ打死と存候て
旗本衆も旗本衆も籠城の事ハ存候て思ひ案の存念申候
所存して居候時ハ大坂籠城の時は旗本衆旗本衆
御方の旗本衆何れも旗本衆ニ候ハて籠城いたし候旗本衆
ニ而如何ニ申や大坂籠城の由承候ニ付て大坂の城ハ天下の城ニ候
事ニ候て大坂の城ハ旗本の内存候事とも有之候ハ日本中
の人数ニ而大坂の城の籠城を可仕と存候処
其二月十日日本中勢此城ニ而討死しても日本中の兵を集め
籠城仕候其上二月十日大坂籠城の由承り候
大坂ハ籠城をも思ひ候て籠城を御覧候て其いたし候

てハ一日も堪忍仕るまじきのよし次郎丈夫は七日堪忍すべし
いかさまにも御の用に立べからん此中某をまきこし候
ても存じ候にて侍らんやきよし記候し候ぬ必定と覚候つる
へきや事極らぬ内は誰も申合せて出入とも堪忍
極りける時は否と哈ては堪忍ならぬものを申しハそれ存分に
遠て申付し申来りハ否と存ては堪忍仕候はぬよし来れ
去りながら某存ても出あひ申す焼失の門殿にて後の事を
当ても云ぬ人へ候し此都にて日比中懸乱気にしても文字
遠へても七んなし、とて事にハれ候ニ年来の他請太郎にも
然は太郎出かなし詮ニ事も言事ハれならも請ふ家中の者共の

されたるはさ肉縁にてハよく知りて候にても如法よく
然る都にて川となり入りしせハ時よ附んとて志思ひ方新部
左衛門の曾理も考て記申ハ方ゆえに年来の請太郎亮
小早川殿の記事紙を極めぜしり他にしも門左よ議定せよ
として孫都も門左よ存知して明日早くも合門左へし
とて其日暮日の参合ありまし候にハ其方の中よりもちや
家臣共へ肉縁にて人をまいりし明日ハまてよりけ此地を
門左衛門を始として人数を揃れ申しいはつたる人も
かてそ日より揃へる人もなかりし之まはりの者あれは
行儀なりし出家めをりて人へもなりし其日中脚んよ存て気

一度ならす二度ならす諸大将再三申候へとも隆景は今月五日
として立おくへしとせられ候によて附而来毎度申候ハ此中
各の申候は遠くより来りて疲れ敵も鋒鋭くきを差ちる
人ハ此手細かに此川を越てさし急には此方も居候て大明人
猛勢にて押寄候も知らすして退く也退け進むまじき
べし其後は一合戦仕て退く也不仕合戦不仕時は
敵は隙を見たてくれて大勢退くまじくらん今朝より来候の
此気色も不苦候推量申事也一定明日の合戦は案
て仕候によ人数を揃敵を放火して退くへし明日合戦
利運にあらすは日本の恥なり自然又利を失ひて日本の

恥辱ならへし後は一合戦仕て立花殿近所へ陣取居候へ共
自身ハ二の後久留米侍従殿筑紫上野介毛利七郎兵衛尉
ハ二の備に立て再度も戦て大明人を悉退居し数万人
討落て朝鮮の敵も徒居して門前にも大勢合戦也
り小太閤記に見えたりへとも一て能少居付て事ハ委細書
するといへとも夫も又不知事なし本文ハ書籍に
依仕出候に付て委細も不能載事するといへ中略に付て書に
隆景也として書き御待り無

加藤左馬介嘉明

○常山紀談　慶長二年朝鮮番船数百艘を唐島に向て日本の
軍船を防く諸将番船を乗取るへき評定あり加藤左馬介嘉明
目に余る大軍を小勢をもつていかて打勝へきと云れしかは階々に
手勢者に下知し五人十人船に乗り番船の方に漕向ふ嘉明
法を覚く来を押止よと追しくに船を寄られしか良ありて者
押止けは止らしと云ひ捨て船に乗り漕出を河合庄蔵同
庄三郎荻野継重かき舞の三郎五人打乗て番船の中に
押入てり三郎船を何まて同西中の一番船に付けよと
下知して揉て手勢の数を揃ひに移り船底に入て剣戟

抽き離さんとて強く言つけるに赤須も中々ためらひて巻込
られし従者共ハ強くさき隠て船入て投切して本船を
乗の者これも諸船も追つゞき船を押出し本船に残る
の兵卒大勢横船を占るもの多し河合庄二郎ハ十六歳
なりけるが大勢ありとて海に飛込て溺死せし細川帯刀家臣加茂捨七郎
務まてける功名あり赤須一人の武勇にて七月十六日白昼に
押寄る番船百二十艘一艘に五百人三百人乗組たるに僅の手筆
にて悉く海に切沈めけるハ古今類ひ希なる事なり秀吉
感悦せられ六万二千石を増録して十万石を与へらる池田家の
長臣池田河内守ハ赤須の子にて河内か胄伊賀ハ外孫也 伊賀ハ

若き時外王父に武功の事を問ひまてさて今ハ年老てさらに
皆忘れたるといのに云て止られぬ(?)から高麗の船軍の事を問ふに
十六歳なりし小姓の船に家隷の附人(?)ニ中り海に落て死し
けりき承候の哀とし出来るを語りて外の事に及ハさり
しとぞ

○同書朝鮮より虎と象とを献せしに来る象ハ乗馴の(?)ものなる(?)を
細き縄にて牽行り虎ハ鉄の鎖を付たるに七八人免(?)して
牽来る朝鮮渡海の諸将一上(?)各居所に取り集まる時
破虎を大身の男様子に在ける頂を抑へども云て居へいとらも
無在ける中を通る人皆驚き居たるに隆(?)法(?)庫(?)一些(?)

掘り壁を除りて見出してすりとに眺められしに扉も去りしに
止りて清正も眺めて出でぬ嘉明は築きよりかへりて居
眺りてありし扉通りありて後も初めに足利ぞ良ありて
眼を凝らし行事に驚き其兎角を筆にまかす故やと
いと志りけりと云れけり

○同書 関ヶ原にて 東照宮未だ岳山に出馬し給はず前
諸大名地の利に據て西に陣をとりしが文禄慶長にて
加藤嘉明の陣所を通る者あり捕へて其ひかへの背を切て捉えと
云ふに嘉明其士は主君の為に死を願ひ其陣所の仮息にまいり
けるにかゝわりして其を察すべき行をして勤でくると勝負にかゝりしに

とて追放されけり

○小幡景憲門人池田勘兵衛聞書

高麗陣ニテ藤堂和泉加藤左馬軍評議シケルニ左馬和泉
存分各別ニシテ問答ニ及フ既ニ左馬過言ニ及フ和泉不[illegible]
引抜キ付ル唯一キト見エシ所誰ヤラン和泉カ左ノ袂ヲ取テ
引ヒ故太刀前ヘ下リ左馬居ラレ候畳膝ギハヘ討込サレ氏
左馬ウゴキモセズ大男メガタワケヲスルト申サレ如何ニモ
動カズ其内人々取サヘ候ト申ス殊ノ外ニ左馬振見事ニ
アリツルト兼ル

藤堂和泉守高虎

○古語ニ云 藤堂和泉守高虎ハ日本井伊掃部頭直孝と
両人ハ家列ニ於テ諸侯ニ並然ハ成而忠孝ハ一云中
度義之出来候得ハ此へりし 日本ニ而不通之由申ても此度之様ニ
出有者ハ之事ニ戦干時掃部頭如何ニ有事ハ思案之
兵勢よりへ 天下ニ挨拶して 御三家ハ家列 并而
しても是大名もあきらの事申ハ是故戦之ハ日本
不通之由申ても此大名の一言とハ甚大事ニ候也
まし成りし是ハ候而ハ安し古酒井雅楽頭ハ身分ハ
バ雅楽頭ハ相中之 唯今中ニ而中候ハ万一不忠節ニ

候もあらずして出家し大學へ出仕申て衆徒と成候ものゝ
武功無之候得共官位を取申さん為に出家いたし申候出家之
始末は世俗の家をまねて出家申候は先づ士の恵沢申候は学文分別不申
候も無之候は出家仕候へし候は先づ衆徒仕候由家来列衆中は後大学頭
出家仕候へは所々衆仕候も礼義分りの家来へ挨拶申候へ衆中
うかし出家の道を廃理候へ申候は不及上手の上の分
出家作法衆徒の大学頭を以て先き勤させ人を指立積りさせ
後日の然程もなきやうに成候へ沙汰成兼候へと評判
もありけるとぞ

○集義外書 此書ハ熊沢了介著拾六巻アリ 明友問て曰あまた人

在あまた入候事まゝ有之事に御座候は固より人と
打ち二人挨拶分不申して或は挨拶致し申す候諸人へ迷惑
仕候と申は昔もありつる事にて候や若き者共へ先年之事目
見へ候ても若き時分老人の挨拶を申つる事に候由在家の若衆
和泉屋へ出入の所へ伴ひ一座の達を出会申ても和泉屋
五百枚の運上を指上させ申候は和泉屋などへ伴ひ申所へ
献上の物ならて無之ひて去つて見るまゝに献上不致候ても
毎年ならば何のよしこそ伴ひ一座へ他の達をも
よせ候して一人出てあまたの達の達の事なり
三年振りに百姓共此より五年振りに献上五百枚

しれんとはやく天下を治め玉ふ所へ入らせ給はんとの
事なるへし　我一国のみの迷惑にあらす天下の人々も大分の
損也これによりて見るへきことは何事に於ても年貢収納の百姓に於て
十倍の費倍の利を得て是を人々にとらせ事に家中の
百姓のためにもあしきことを申付てあひ役をも好むものもあるへし
百姓の痛みは国の損なりとすることを能わきまへて治むる者なき
二度とよきことあらしとて太守感して是を人々に示されける
○
宗徒の者共　朝鮮征伐の時に高虎殿とも加藤侍従
秘手先登の功を争ひ座上にて国論に及はんとせしを
諸将制止して事やむことなりしか後に大将の通して大目付

寛永四年の比にや会津城主中将忠郷卿卒せられて
会津中将の遺跡伊予松山城へ移られける時に高虎殿
をはしめ会津の旗頭の輩もおほくして是非も諸役の沙汰なく
皆旧臣ともは家中に召出されしかは高虎殿年老ての後　北
守りはいかにも国の守護し申されけるかさらにも
諸の輩を入らんとせしかは加藤殿もとて至極に申されし
然らは四十万石を出して能此事申されけるに加藤は老年
不知の事なり　今又推挙あるはいかゝなれとし　上意なりしに
高虎遠慮は私の事にあらす国家の大事にてこそ
私ならん大義を存して申上にして申されけり　御感に及ふ

清蔵ありて赤阪ニ舎律を張り深十万石あまりして極め覧
此首をも遣さを張りける翻ニ赤羽風聞ニ於てをま覧
しれ気我親しありし也

○老人雑話

藤堂和泉守高虎家の者と云人に語ハ侍る太閤の
陣之時ニ何ものあつまて所謂着を脇さし名を佩刀を
行き人渡せ者の言しけるは文禄之末れ中ニ通せんとて
申も留さりけり一度仙ニ住て又来りけれハ申紀をあまり
けの気ありけり

○武林隠見録　　　藤堂大学頭高睦

藤堂大学頭殿ハ深井屋敷ニ御居住之節家老ニ
和泉守上屋敷ニ於て指示ニ去浪人方ゟ掃刀金子ニ拾両を
之調申所存ニ候之処ニ被仰付金子五十枚の折紙付之刀ニ候て
掘出し候也しかして右之浪人ニ申付大学頭殿上屋敷へ之参ニ付
掘出とやらん之段御屋敷内より之拙者井戸より掘出され
けれしとさしと云はなけて尋られ候ニ付和泉守様御披露ニいやさ候
少ていの浪人方ゟ五十枚ニ調申候方申所存ニ候間申上候とて金
五十枚の折紙を兵銭ニ弁掘出し中候ニ付申しまかれハ大学頭
之申ハ何ぞの屋敷より掘出候やと思召候而之浪人へ之申方より

五千両ありて潤ひ居し其五千枚を知りけるにしかと左様の者は大名
あるいは小判なりのものは大名は五千枚百枚判を
すゝめは百枚に潤ひ成程に此節に浪人風情なども大切に
思はるゝものなれ共浪人方へ五千枚の代金を渡しは指出し三千
りれとも御用人方より浪人も呼寄刀の代金三百両余お渡され
けるとぞ

立花道雪翁

○

常山紀談

立花道雪 まとしめ戸次といふ立花の讃を嗣しゆへ立花と称し候の 名を鑑連男子なく高橋紹運の子を養嗣とせし

若かりし時雷に撃たれ足を痛めしが[illegible]常に[illegible]
家来より累代大友家に属して大友家衰へけれとも道雪を
変せず戦の時選しき人にて士卒を[illegible]
めし戦に臨む時は二尺七寸ありける刀と種子島の鉄砲を手
おしよ入二三人手の輿に乗り腕首をして手に提け家らり長き
刀挿したる若き士百余人に輿の左右に并具し軍始まりて
手輿を共に挟みもちて手輿を打き[illegible]と声を

あけはなしても敵の手中にかけ入よとて柄をにぎる時は無分
後を押へまはりたる敵に逃てまはりも知らずして面も振らず押入
るまゝには無二の左右の士三人余りの刀を抽放して一文字に切く
ものなるに先陣のものともいや後の者共なるよしと云もあへす
者共われおとらしと競ひかゝりいかなる堅陣をも切崩さんといかなるかし
若き者共陣を進まんとする時は老者大将を揚て若き敵の中へかけ入よ
命惜くは之を後へ退よと眼をいからし下知せられし程に返
して踏止る事なかりしかは道雪の士は一日に数度陣を合せ
たりと云者なし又道雪か後にては古き士に弱き者は老たる若き
者あらは其人の恥にあらす大将の一扇をあけざる罪なりと云ふ

云ふや否や下知によつて度々切崩されし事あり此戦の勢にて
おもはせてつかふ士あつまりて吾者に事を仕へよとりかへて遠物にてせん
我士の四月朔日（ワタヌキ）左五手崎は若き時初ての軍に打負けし事のあり
しよりの後よりかゝる血をそゝき事に遭て次第に物に慣たるは
大六人の劉の者と世にいはれたりしとて偏武功なき人あれは
あき塞りのあるは兄の合せへ武功の事に弱からさるは吾ん
定あるくらり眼目にも軍に知らん人にならされて必そ
指揮して討死し或は分られは不慮之身をも全して後世にも
継て後まては名を手につけたまふとしてか年老たる身は
敵の手中にありて討るゝとたゝりの為をなんせさるとしいと窺に

睦しく云て酒飲なとし其比はやりける武芸を好て専らにしく
立入られまして其上に励ませられて主君軍の事を心得ん時出世人
にも後まし〳〵とも勇ミて弥も武者の徳を修めれは何事も人に劣らぬ
此道をもなりえんし士に遠からぬ者あらは浦まてする武の者は
只其身て稀には能く心得してよしと云文人は見知をも含ミけるすの
此道をは天の冥加にも叶ひて来らしよしと勇めなるへき士の席上
みて能ある人まても有事此わけをし時は実社家をかせよ
ほめ其乃音を士にあらはるましくあまさ我か家軍に
勝て武道を教しは陸は此人にて能をまもりて陸進をする
其仰して参らまてかくし人を励し涙を流し此人の為命を捨んと

励ミけり
一 乃雪の如くなる仕る世にも心をかよはせ未たわりける者も知らぬ仰ことに
わりける其を知る者ありて戦場の時中ける東雲の大将に
陸とは知れは露霜の世に登るに勝を通はれ者のゆひしを捨て
られまじとおもふに兵事をつぎたしとて道を士の善を識られり乃音も
者あらは若ききも其色に迷ひなきは必しも勝をもなりかたけれ
人のよふに居て君を仰かまへんに如ありてあの事よ人を教をは
人心の背くるを国の大法を犯しつるに其分あるよし語られ
りける後来ゆへ其中に然入乃音の仁義の盛なる薩摩の
軍陣の岳の城を攻る時乃雪城を出て戦ひしに大軍押寄せ

花々しく防き戦ひ敵兵大に騒ぎて味方も励まして鎮りける
ここに寄手の中に戸次か城に入て門をさして敵彼岸をさゝへまもりて
城の外にて何人か討死しけれとも敵兵は又一人も無し武士の討死せしき
不意の夜中に寄手の者共討死せし城兵は敵を防きまれしと無きや
人々皆と云伝ふに旗を振て其打取けれは無事に終せし兵士二人あり
面を振ひ戦ひて討死しけるに城中の者皆関たりけり

一 天正十二年大友宗麟猫尾の城を囲みて数十日攻むといへとも猶落す大友
の兵長陣に気つかれてありしを見て戸次道雪高橋紹運にむかひて宗麟に
取次ける様は其陣の儀は長陣し一家の勝負をも
背よしと陣を払ひて八月十八日に土筆を内方へ向けまゐらせし
帰らるゝに下知ありて猫尾を引て高良山の陣へおもむかるゝところより兎
本地猫尾へ押寄へしと下知し紹運も其陣払ひ今宵はや夜
半も過て月も傾きぬ筑後川の辺りまて来る時かへり見れは
敵の中数千騎押来るのみの行かゝり紹運の従者云けれとも左
雲よかくしと云逢ふに左右をも見かへり見れは早く夜の明よ
りしこんてまかりて敵を討切かして押通りしとて宗麟も
打うれしかりて使者に行けり萩尾大膳をつかはし使をして
和睦すへきとて地の紹運の陣へ兼て申ける如く筑後
川へ押付れは東の陣も前に行ての瀬より引へ陣に引入て
取まとめしに押入押通る秋月種実の兵数万兵庫と云ふ者

天下静謐の中にて某程の始より当代として治りける何者たり
誰の軍勢されしや向紀運浪士を加へし元来て一人
も執らんと討手の首を出すべき所に並へ軍神の血祭りとて
吏が石垣辺へ押寄せ陰謀を企てる其網山麓へ立籠り
秋月種実龍葉庵門の者共あつて党を募り夜のつまり
りしなの切所に楯りけ陰謀を起さんとするに付中にも
大将を出さんとして主謀より熟せられ若者にて陰謀を起
りのあり謀主たれしとて金石権兵衛に及べり及雪の蜜議
りきたる人あらはれて倒ましきが某納せしと露見しぬ
及雪妙にてあるまじき事と知りて加へんより密かに陰謀を

起さんとしても思よりりきしのときて陰謀をおこせしがねらひしとき
遠方より数日して中らせしるよし及雪ゆるに紀運の士とかれ
は初めよりあるまじきとの旨申さる詞をうかまへ紀運市川平兵衛と
云ものに命せられけり平兵衛かねてより陰謀をうかがひしより
而して又破来ほどより同志一輩相計り市川平兵衛早々書
くりしに眉間を掠り勝負をしかけ卿の倒ましき事に敵を
よりて元様をも知れたる陰謀の由井雪加より道寄へ使者を
以て今討死をも遂べきとし中途にて紀運に大将への一に
急を告げし味方の陰謀危くして此切不載難くるべしとて
五て五十敵を追払て其網山の山頂に押上たりしかもや

久日よおよへり流罪遠しとし押出もしらそと府を仕あよ
今度は是非に陰せへきとて曉席よ於て都を出て雨降出
まして日あ於おえりて十華に詞を残け若りとに元より
の恩を忘れぬ懐を残し給ひ去りまてとも見給を見へ給ひしに
かくて二条にては御陣しけれの方も終に押付らるまじしとし
豊後の名残惜しみ参り宗麟も於於その旅宿駆引の
知るべしとし岩殿し流罪によ及はまてもいと申して給ひ
されたりし宗麟は人とし思ひきれとり九州国家
も俄よ心ちらりして全き行具して豊後よ参りけれども思ひ
しるべき事侍らん宗麟も門人出てしまいけれは両将は高良山よ

陣して言ふ年を送りぬ御名には天正十三年の事にて雨ひに終に降
かへ来たる筑後国の道雪は北野村天神の壇
よ於て時まりしに病つきてはや年を越へ終に病死し
たりし子に戸次甲冑を着せる高良山の麓への柳川の方へ
向て埋むへし此事空しきとかいは音識少将のちへ
送るらし九月十三日七十二歳にて没とし給ふにかくて其より残
十時摂津守を使として立花の城へやり統虎に加へよしとして
戸次をも見せし人抜かんとの訛も免まじして立花へ返
入るへきと思へらまじとの十時摂津守は此事をいへは由布雪下
されは伯の訛は本何かれはかされるも遺言残置りけれとも

皆こと〳〵歸し　雲加先立て腹を切けるに各々へしと云ひけれは
由井太郎某も腹を切大鏡の後に残るへしといふへきにもし
いかてか残り止るへきとし殉死せし人数多かりしその時
兵庫頭内藤播磨守をしとゝめて名をも後の世に留んとて
殉死をとゝめし鏡屏風の内によりかゝりなんや末期の様にもて
闘死せんよりは腹を切らせてこそよかるへしとあらそひ云ひ
けれとも雲加是をきかすして君思ひ止るへし候は立花に
在しまいらせ出ける事殉死へし　其のかたみに雲加の籏
羽を歸らし致して九月廿日に陳拂して道雪の柩の供
して立花へ歸りける

○

高橋紹運

常山紀談　島津義久同宗家忠長伊集院右衛門大夫を大将として
兵五万余をもて筑前岩屋の城を攻る　岩屋は要害の
地にあらす寶満の嶽は猶険阻にて防く便よしと云ものあり紹運
云やうは寶満の岳に入りてれたりとて防へきにあらす敵に寄られ
て逃たりと謗られんも口惜し　此城を墓所と定めけりとそあり
ともかくも岩屋を囲んて攻く　城中のよれも翻る事もなく
義久の士大将新納武藏守忠元其身をもて城中へ入るや
のゝしり　紹運に向ひて何事にかと問へは新納申けるは
紹運の武勇世に知られたりといへとも大友家に与せて色をいひ

喪られん事遁るまじき大敵は切支丹を宗旨として徒黨
の具へつきたる者と云ば古き綱に一張一弛と申事の候て義久と
和平せし事有へしと云ひけれとも結運尽て如く申には福家とて
麻生外記と申者ては只今我は左程結運にて御弟の事にも
かまはれぬ那義の事ましてもちの事なれは人々能々存候へ
まへて盛衰消長は時の運にて古の細川畠山赤松山名
を始として今川武田を初として尼子大内某一度は盛にし一度は
衰へたるものは結運今の限りになりても貴を統
て隆家に各ましし甚申へきや大家の家も右大将頼朝公の
時より子孫国を受け継へ給れし日向の軍に敗まけしより

二心ある者多く出来て今かく衰へたりされ共今にても
秀吉公大軍にて九州に向ひ給ひ薩摩へ攻入られなば
嶋津家の勝まらん事も定らず勢つき運衰へ始めんこと
志を如何なれば家ハ老なき者の配摩にて人々は後世まで
るべし 松は千年経て折る事なし 人生は朝露の日をうけて
消ゆるがごとし 只永く世に残らんものは義を守りて名を後世に残すにて
降参は仕らじとて終に命にかけられけれ共新納も又去年より
かり外記とは左様にはれども結運尽じ如かる詞残せん
人やあるべしと云ひあへるも加へて終に降参を勧めて荘厳寺
の僧を使としけれ共不入をさらは攻よとて天正十四年七月

廿七日四方ゟ押よせ岡の崎を請とり掛声をあけ鬨の声を出しつゝ
攻寄りけれハ城中ニハ思ひ設けたる事なれハ家を限りと防き
けれとも終に乗取られけり三ノ丸組ハ
井上掃部如キの者きハ久しく此天津宮ニて堂之あくかき
と二首の哥を壊の柱に書付して討死に及ふ別平内ハ隠岐
の毛利之兵衛か上りさし詰川の向第経權守次
郡衛門りかられの手に痛手を負ひ敵の中に兄入て討死けり
三ノ鶴総兵衛ハ保坂九郎も守の丸の前の手にかれもせ物の奥さま
中の所の敵を目にかけて数多斬倒し名経も責られたる
刀の切先を揃へて井て若数しよ踏ひ一足も引ます討死し
けり尾上中務か子右衛門次郎十五歳なりしか父と一所に死なんとて
出けるを母継を組へはかりに振切て敵の中へ近入討死しけり
さるの所継母の手に残りけれと別り書手も討うし
屍に見方の谷を棺ニ経にて城えなく別りしても何よ
なかれらしめくさし討て若嘆き叫んて残りしか家経の等なにも
人によ笑はれしといさとて或ハ腹を切或ハ敵と引組て刺違へ
挑を並へて討死せし組運ハ江副右馬允三浦式部丞岩隼人正
曲者にも皆利殺して敵此手にかけそしてあし眉実刀并
ありし藤て足らまりし今ハ是とふとて我身を門の前にて生先
られけり

かゝりけるに岩屋此苔に埋てそ雲井の空に名をとゝむへき

一説に
流をの末此世に久しく埋まじぬ名をのみ岩屋の苔は朽らむ

かくて将卒三千九百人にて自害して果られけり士卒も嫌す深く
義を思ひけりしかは殺も知れ城をまもりて千八百人の士卒ともに
遂に討死の名ありしは誠に有難き事に紹運初は鎮種と
申けり

一説に城中の婦人は悉く囲みの内に生害し又は籠に入り自害し
又はとらへられ又紹運薩摩の軍をあしらひ手負のまゝ押出る
紹運人々に向ひ今押寄る数二万余人二千余騎の者も有へし
今宵の戦に討死すへし敵数は七又二万余の軍勢なれは
して陣営の白骨となるへし人生は朝露の日影を待かことし義を泰山より重く
御身の事武士の本意とし云れしかは城兵皆身命を惜まず

一陣にかかりて薩兵を切崩し一人も残らず討死せられしに島津の大将
島津義久かりゝ之を入り紹運の討死の其の首を実検し島津中務
に書状を以て家久へ送り…義の事を語り…別に一封の書を大将に送り
…勇将を殺しけるよと歎き…涙を流し…華札を持参り所ひ壇を築きて義久は香を焚き再拝せられ義久も感せる
国風にて薩摩の武者皆焼香して隠を
流し紹運を称美しけるとかや

此条一本ニ別条ノ註ニ連書ス
一 岩屋落城の一説に天正十四年六月島津忠長伊集院忠棟
大将として筑後に二万余人にて押入島津義久の名代…
肥後北八代に陣を取し所を焼働く筑紫広門の方に人数を
籠りて防しは城を落させし防戦の後七月七日薩摩
勢の軍筑後門を隔て高橋の日夜門を閉て広門を生捕にする
同月十二日に陣の大将大宰府観世音寺に陣をとり岩屋を囲む

秋月種実を始として相加はり十万余にて岩屋の麓に陣し
横岳二日市太宰府の辺に陣を取り遠く取て陣を在将荘厳寺
の備を以てして此度太宰府に攻寄られ紹運に対して云へきとて茶
に詳を遣はし庄門二つあるにより其を使へき為にて我に庄門で
生捕りぬ宝満の嶽に紹運の家室を預けて置く守らせられ
岩屋謂らるるに似たりとし宝満を渡されよと云遣り
けり。紹運取り合はず一言も答へず押て太宰府を攻て
来りかかりは城中を馬蹄に蹴散らされ仕事にて落尾
中鳥し統虎にも
遺言の趣を述て
立花と称せし
紹運も今ここにありて宝満
秀吉に属し出へきと宝満も岩屋も関白の城に出で渡し

敵も高橋の城を使僧を以て云入れたれとも承引なく
し城を渡すへき紹運にあらさりしに因てことて攻手
口々の攻手を定め七月十四日より攻寄り矢合を始め
打つされとも城中堅く守りて討取める御も多く東の方
屋山中務少輔は搦手より随兵石田をして三百余城へ攻寄る者も
寄りける敵数百人を討殺し其首を知らしあり付旗の先
多く其より急に攻て新納忠元は年者なれは紹運公は中へ
書状をもって以へ紹運麻生外記を為して詞戦に及べて降人
詞を以て利害を説き大友家にては切支丹の宗門を信
ありて神明仏法を蔑にし天道に背くまでし四人をも殺く

少なかりし城を進ミすなハち島津に屈せられ長々籠城し中ニも今
紹運節義を統て屍骸の色かく米かまハ実に九州へ名を出せる
へくハさらに島津家も散々をも生なから立の時か時果を
致し寿る時ハ撰もかへさるを以て今矢あるの屍を甘んし生
島津家郷士の時を除て形をかくさす蓬らされし安ん彩
しく目を余か十万の士卒も百年の鉾を保ち色さ加かる時も
当時なり士の義をうる氏を十ハを称せらるへ気まして誇るへさるよ
ハ只ひと太刀の大将ニて荘巌寺の僧を使とし八ヶ国の
大軍を引受け岩屋に城を高らかに弐十七日に及へり紹運公
の武名九州にたかるへし実満之紀岩屋九子細なりし初陣を

立続ハ筆にかへし国を名しかくしけへし終れ九十万の軍士の
見え少しも一人人質を備ちかんやさらにも薩摩大友島津
秋月ハ紹運公の命にあるへし其初めに於て見人質を
之し九州一統に島津に属しかん豊後中国に渡り島津家
天下に旗を立しへしと云遂ヘしからも紹運法寺を頂
人質を関白に大友家に出さん事これにありかん秋月
指宿竜造寺なとふしそれより九州一統に乱に及へり
根本の人なまてし秋月を後御も薩州の右将より今度の
子島ハ東郡文豊州への忌根にありし龍葉廣つか反ヲも
紀明せん為へ神文を奉て備りしゆひ加えし紹運公のよく

叶ふへし然らハ此城を以て墳墓となさんと言ひまししかハ
和田も事承て殊更七月廿七日に諸軍一同に押寄せて卯の
刻より寄手揃りて午の刻の頃まて寄手の大軍入替々々
攻けれとも胤貞討死数多出しけれハ死骸を踏越え
寄せても猶ら堪て城の踏破りも限りと思ひ切つる城兵共
持ちて互に門を出て切死にしたりけれハ城際の館違の丸
本丸に倉を構つる刻の者共五十余人ほと討死せられける後藤の
勝頼をも思へ打て今も官軍の軍勢なれとも南方を無事に
向ひ者の切先を揃へて打て出一陣二陣を追の苦屋に
まくり入れとも半時斗りに攻入破つけり館違も胤貞

討死の士卒をなくめりて死するものの中に云二の丸に討ちまし
詞にまかせ一揆しまとのかよへる者なれハ自ら氣付けの薬を
口に入られけるにかへる事にて後でも正気なれハ
数年城を守りし甲斐なき事に切て捨てし今度ハ方々も違ひ
苦く候ふ事と兼ての恩賞に違ひ士卒共へも疾く
しハ難き事にいひあへりて後館違雑刀提け思ひ
殿ひて辞世の和歌を扇に書付二十九歳にて腹を切らし
しける寄手攻入て敵なからかゝる大将もあるへきや
士卒共へも家来も近き事も無く見しも惜まぬ人も
無し内室をはしめ判数多有し惟なりて国と共に

深く恥しも当りけり去年より爰ぞ統増并宝満ヶ嶽に
ありける薩州より使者を以て城を渡されよと云送る統増云く
十五歳なりけり城中の外に軍兵なく纔か兵よりも
あらん秀吉の出師を待つへくこらへ日数へて時を
得ずして去とも相申けり統増を立花に送り届けなは
ありなは和平すへし然らずんは城を枕に切死すへきと
遣へられて寄手返り子細あらじと許諾し神文を書て
統増しか城を渡しーーかりて立花に送りかへす
立後紀後の者と云ふに移し舊臣を悉く紹運の
肉字は絶後来るの国となり此所に移し爰に立花へ使を以て
降参せられ候へと云送る統虎答へて云ふ紹運は関白の為に
自害を遂け死去る父紹運の為に自害を遂へし是に軍兵
あらはこそ共に拙城の切腹して薩摩に仕らんと返送られけれは
加ふる事なく八代に陣せられし義久へかく有と申に下知し
秀吉出陣の由を聞いて是を云ひ付させ是等と云を加ふへしと
聞けれは去て八月廿四日太宰府を引払ひ統虎軍を揮
出て高良山の城を攻落し城を守中将忠備軍を駆先
慮く斬ちされ岩屋に向ふ又立花の内より出陣利在の
とりへ去る然ひして出馬をしけつりしより関東記もらく
延長りけり秀吉感状を贈ひなと出世せられ統虎文書に

諸道寺に水の宮に押寄られて無き寺ひありあまた候し
都まゐれ〳〵りの跳道寺も薩摩としら家老つき船あそし〳〵ん
船路にして堀江まて御しうち寄せて軍兵数多出して此の
国に押寄薩摩の君の手を退散し館遅の源家を尊
ありけりて主従へ送り居けり浦家討たん者陸兵を宗
とし云〳〵是を如くして薩摩守を鎮将と八代へ移し守護
加の陸兵寺にありて警固の兵を農に立ちらせられ代
りて君を揃へて陸を足らせらる中国とい立さりぬ
陸中も出へき御座して目を送りけるに接待やや
多くあん薩摩に移し下豊後と云ふ所に動けり秀吉九州へ
渡海し先陣薩摩守平家追退こしらて統帥使者して統帥
を渡し立らんやと義久のめとに云送らまいりけれと義久
子細に及ひ兵を集らせて付き兵を寄へ及ひとりしらに十時
揃陣を定と云ふして下豊後にあし出陣ことに向ふても残らす
引ありて平家へ引送り海辺を見るに秀吉の軍兵船を
うけ並へ居たり戦へとらんて旗をかかて小船に宗ぬき
しとし陸に上りて取囲んとん十時勝まいて嗜むき者にて
ゆるたるに有りの小船を借り本船に渡りを統帥へ
出立ちけれと大軍と見えしきりの船風厳しく廻り再び
させりて陸へ向ひ陣取られと帰るも遁れて平家

よしなし兄統虎の陣に入て對面せられけり此統虎は後に
左近將監宗茂とて驍勇無双の大将となりし天正十年
十月六日秋月と道雪紹運父子にて軍ありし時紹運
自ら薙刀をふり廻し戦ひけるに統虎十六歳にて
初陣なりしかとも其器量を見たてられて道雪の嗣を
つかせ申て紹運に請て吾子にせられしとそ

一 紹運若き時弥七郎と云しか吉弘鑑理斎藤鎮実の妹を弥七郎
に妻にせんと約束せられけり其後豊後中に軍ありて
縁もさかりしく延引して有しか弥七郎鎮実に對面
有りけるの折から兄弟のむかしのことく延引のこときこえ軍の終にて

かくては遅なりは妹を迎へ申さんと請られけれは鎮實けるか
かたしけなしたとひは志なくともゆかねとも妹疱瘡を煩ひ以の外
みにくう成しかは身中にかはれかたちかはりて人なみならぬまてあれは
今ハ迎へ給ひても叶ひかたし弥七郎色せるへきなれハ
此事を御心ねかひ候の新度郎ハ吉弘大友家にて武勇
道にいたく候間今一たびの迎へ申さんと約束し
つみ事の出せられ候迎も如ます吾容貌はも色にて嫁む心
ゆへ也と招て婚禮ありけり其後二人の男子出来たりしか
統虎は紹運二十歳に及ひまうけりしとかや

淺草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan